

みんなのいきいき
Vol. 14
職場紹介シリーズ 地域連携センター

みなさん、こんにちは。
今回は「地域連携センター」
について紹介します。

「地域連携センター」は
当院を利用される患者さま
が安心して治療を受けて
いただけるようさまざまな
ご支援をさせていただいて
います。他の病院では「患者サポートセンター」や「地域連携
室」という名称で少し名前は違いますが、多くの病院に設置
されています。



私たちの仕事は大きく以下の3つに分けられます。

①入退院支援：急性期病院での治療後の転院相談や患者
さまが住み慣れた地域で安心して暮らせるよう、患者

さま、ご家族さま、地域の関係機関と相談、連携し、退院を
支援します。

②患者相談・医療福祉相談：病気やケガによって生じる患者
さまやご家族さまの経済的・心理的・社会的な問題の解
決を支援します。また、さまざまな相談をお聞きする患者
サポート窓口にもなっています。

③地域連携：地域の診療所や他の医療機関との間に立ち、
当院をご利用いただく患者さまに情報提供を行ったり、紹
介や予約が円滑に行えるようにします。また介護施設との
連携窓口となっています。

働くスタッフは社会福祉士（医療ソーシャルワーカー）、看
護師、事務員と多職種です。場所は病院玄関を入ってすぐ右
に曲がり、外科外来の前にあります。お困りごとがございま
したら、お気軽にお声がけください。

教えて病院の人

意見箱に届いたお子様の質問やご意見に
お答えいたします。



おこたえ

お年寄りの「〇〇したい」のお手伝いをする場所です。
年をとっても体に障害（しょうがい）があるかたも
自分らしくくらしたいと思います。行きたい場所や楽
しいことなどをあきらめず「〇〇したい」という思いを
大切にし、少しでも自分らしくらせるようにお手伝
いしています。

でも、できないことをなんでも助けてしまうことは
ありません。ご自分でできることを大切にしながらお
手伝いします。

「わたしのおじいちゃんは、
はねうまのさとおとまりしていました。
介護ろうじんほけんしせつってなんですか。」

しゅもん

質問者：ひなさん

検査技師長の「病院のおしごととサブカルチャー」

病院には、たくさんの専門職の職員がいます。それぞれの
「おしごと」をわかりやすく、ドラマチックに描いた漫画や映
画・ドラマなどを紹介してまいります。あまり知られていな
い職種でも私たちの仕事に一人でも興味を持っていただけ
たら嬉しいです。

第3回（最終回）：①診療放射線技師（しんりょうほうしやせんぎし）

「ラジエーションハウス」：グランドジャンプ（集英社）



我々の病を見つけるのは、目の前の主
治医だけではなかった！病の原因を探
り、レントゲンやCTで病変を写し出す診
療放射線技師。さらには画像を読み影し病
気を診断する放射線科医。現代医療を支
える「画像診断」の世界。そこで働き、
患者の病、怪我の根源を見つけ出す放射
線のエキスパートたちの戦いを描く！！

「では、放射線科へ行って胸の写真を撮ってきてくだ
さい。」と初診で医師に言われることがありますね。これは、体
を傷つけることなく肺や内臓の状態を見る事ができるため
です。放射線技師さんは、ただレントゲン写真を撮ってくれる
だけではなくCTやMRI画像から3D（立体）画像にして病
変部をわかりやすくする画像処理なども行っています。

②薬剤師（やくざいし）

「アンサンングシンデレラ 病院薬剤師 葵みどり」：
月刊コミックゼノン



総合病院の薬剤師として働く、葵みど
り・26歳。医師のように頼られず、看護師
のように親しまれなくても、今日も彼女は
患者の「当り前の毎日」を守るため、院
内を駆け回る!!称賛されなくてもあなた
を支える医療ドラマ!!

ただ薬局で薬を渡してくれるだけが薬
剤師さんの仕事ではありません。患者さんへの投薬データを
管理して、時には医師へも助言をしたりもする。まさに薬の
プロフェッショナルです。

日々新しい治療薬が発売されている中で、よくそんなに覚
えられるなあと感じています。安心して出された薬が飲め
ているのも薬剤師さんのおかげですね。

いかがでしたでしょうか？全3回の比較的、病院の中でも
縁の下の力持ち的な業種を紹介させていただきました。ま
だまだ多くの職種の方々が働いております。そんな職種
の方はまたの機会に……。

地域に開かれ、親しまれる病院をめざして

みてくんない

けいなん通信 Vol.15

2025年
10月号

ご自由
にお持ちください

特集

未来に向けた上越地域の医療体制

●検査技師長の「病院のおしごととサブカルチャー」

●病院からのお知らせ

表紙を飾る写真・イラストの
作品を募集しています！

詳しくは病院
ホームページを
ご覧ください。



採用者には粗品を進呈
いたします



おなごまの健康と心を守るに

JA新潟厚生連

けいなん総合病院

けいなん総合病院季刊誌「みてくんない けいなん通信」 2025年10月号
けいなん総合病院 発行人 病院長 平野 正明 〒944-8501新潟県妙高市田町2-4-7 TEL.0255-72-3161（代表） FAX.0255-73-8102 E-mail : info@keinsansogo.jp



未来に向けた上越地域の医療体制

かごしま みつる
上越エリア統括病院長 上越総合病院 病院長 籠島 充

—未来に向けた上越地域の医療体制ということでお伺いさせてください。

JA新潟厚生連の現状と役割について

地域と向き合って、地域の課題を見つけ、その課題を解決するために地域の方と同じ目線で一緒に考えていく、というのがJA新潟厚生連病院の役割だと思っています。

地域で幸せに生活するためにも大事なものが医療であり、健康です。医療の受け手である患者さんや患者さんが暮らす地域など全体に目を向けながら、地域の健康問題と一緒に考え、解決しようというのが厚生連病院のスタンスであり、そのような医療を実現すべくこれからも取り組んでいきたい。この思いは全く変わっていません。

ただ、近年の医療情勢が厳しいのは確かです。一時期、運転資金の面で、患者さんをはじめ地域の方々にご心配をおかけしました。各種対策を講じ、併せて公的支援などを頂戴して、今後の事業運営に一定の方向性が見えたところですが、まだ厳しい状況ではあります。引き続き経営改善に取り組みたいと考えています。

新潟県地域医療構想とは

医療というのは地域の暮らしに欠かせないもの

の、警察や消防などと同じように地域のインフラです。そういう意味では、今まであるものが維持できれば一番いいと思っていますが、残念ながら、どの地域でもそれが難しくなっているのが現実です。

2022年に策定された新潟県地域医療構想というものがあります。これは地域の医療を守るために地域の医療の未来像をみんなで考えることであり、ここでいうみんなとは、地域に暮らす住民のみなさんです。病院側が地域の皆さんの考えを代弁して、「どのようにしたら、地域の医療を守ってゆけるのかを考えてゆく動きです。現状維持が難しいのなら、どうやってみなさんが納得できるものにしていくか、それが地域医療構想だと思うのです。どういう規模の施設を配置し、どうやって医療従事者を確保するか、そしてその役割分担は…そういうことも含めて、言い換えれば「リ・デザイン」ですね。この地域の医療の未来像を根本的に再デザインしていくのが地域医療構想だと私は考えます。

地域医療構想を実施するメリット

地域医療構想のグランドデザインというものがあり、それに沿って新潟県は地域医療構想を描き、上越医療圏(上越市、糸魚川市、妙高市で構成され、県内7つの二次医療圏の一つです)もそれを踏襲しています。基本的には県内の各二次医療圏内で救急や高度な医療は一つの中核病院にまとめます。回りの病院はそこでの急性期の治療が終わった人を受け入れて、回復期から慢性期、かかりつけ医の働きまで幅広い機能を持つ、地域包括ケアを支える位置づけになります。急性期は集約し回転をよくする。回復期はそれを受け入れてフォローする。診療

体制を含め様々な面で効率が良くなりますし、人材の活用もしやすくなります。

例えば、医者の中核施設に集約し、ここから曜日ごとに回復期以降の病院へ行って患者さんを診る。中核病院と回復期以降の周辺の病院の間では患者さんも動くけれど、医者やスタッフも自由に動けるようにしないといけないと思っています。

エリア制の導入 一地域の健康を実現していくために

県内で地域医療構想の話し合いを最初に始めたのが、この上越地域エリアです。私はこれから先この地域の医療を守ってゆくためには、この地域医療構想を実現する必要があると思っています。そのためには、今ある病院を何が何でもそのままの形で残すという発想だけではなく、新しい考え方を取り入れるべきで、そうしないと、前へ進んでいけません。

上越エリアのJA新潟厚生連病院でエリア制を導入して1年。以前は、けいなん総合病院、糸魚川総合病院、そして上越総合病院は、お互いがライバル同士でもありました。患者さんを取り合い、医者を取り合い…この状態ではうまくいくわけがない。人口が減って医療従事者の確保が難しくなっているのに、医療に求められる質は高くなり、診療時間も長くなっています。このような状況で、個々の病院がそれぞれ頑張っても、うまくゆきません。その状態から前進するべく、3病院がそれぞれの伝統を重んじ、個性を尊重しながらも、一体となって力を合わせ、地域を健康にしていこうという目的で、「エリア制」をスタートしました。

エリア制の理念のひとつは「人」。職員と患者さんです。そしてもうひとつは「モノ」、医療材料と医療器械。そういったものを互いに分かち合いながら上手に共有して、動かして、医療の質を維持しながら、地域の方の幸せに貢献していくのです。1本(1病院)では立ってはいられないけれど、毛利元就の3本の矢の如く、協力し合う体制ですね。例えば、けいなん総合病院や糸魚川総合病院の急性期の患者さんは、上越総合病院へ。回復期以降は、またそれぞれの病院へというような協力が考えられます。つまりこれは県が地域医療構想で行おうとしている役割分担の厚生連版。地域医療構想の厚生連版ですね。それこそがエリア制です。

地域の方々に向けてのメッセージ

世の中はものすごいスピードで変わっています。

それと同様に、残念ながら、医療のあり方も今までと同じではられません。行政や学校、JAなどと同じように、合併したり、規模が変わったり、名前が変わったりすることがあるかもしれないけれど、そんな中でも、地域の方々がある程度は納得できるような未来を作るために、我々厚生連病院は一生懸命考え、実現に向けて動き出しています。それは安心して暮らせる地域を守るためです。

ぜひ3病院のファンになって、これからも病院と仲良くしていただけたらと願っています。

妙高・新井地域の現状と未来について

けいなん総合病院
病院長 総合内科・消化器内科
平野 正明



「日本の人口変化を考えれば、病院は撤退戦を敷かなければいけない状況だ。撤退しながら、そこに住む人々の命と健康を守る、大変な戦いをしなければいけない局面である」。非常に厳しい言葉ですが、これは日本病院学会の会長講演の言葉です。

現実として、今年に入ってから、自治体病院を含む多くの医療機関が大きな赤字を計上し、地域医療の存続に黄信号が灯っているのは皆さまがご存知の通りです。私たち新潟厚生連も昨年7月に経営危機が表面化し、皆さまに大変なご心配をお掛けしました。今後、病院の閉院や倒産といったことも、決して珍しいことではなくなるのかもしれない。

「人口減少社会」、「少子高齢化」、この言葉が意味することは、医療や介護を必要とする人が増える一方で、支える側の若い世代が少なくなっていく未来です。実際、人材の募集をしても、地方に赴任してくれる医療従事者が、なかなかいないことを痛感しています。このように厳しい状況の中で、それぞれの病院が今までと同じことを繰り返していたのでは、冒頭の言葉の通り、地域医療が立ち行かなくなることが懸念されます。

新潟厚生連は、「地域の健康を支える」ことを最大の使命として、今後も皆さまに「安全で安心できる医療」を提供できるように成長・進化していく決意です。先行き不透明な環境ではありますが、籠島充、上越エリア統括病院長を先頭に、上越エリアを1つの病院群として、皆さまが安心してご利用いただける病院群を作り、一方で、魅力ある職場を作ることによって、人材の採用・育成・交流、研修・教育の推進、財務基盤の強化を図って参ります。

「順境よし、逆境さらによし」、「ピンチはチャンス」という言葉もあります。悲観的だけになるのではなく、昨今の厳しい環境をむしろ大きく変化する機会と捉えて、厚生連病院群はダイナミックな変化を遂げたいと考えています。今後とも何卒よろしくお願いいたします。